

Microdifferential Equations  
with Non-Involutory Characteristics.

防衛大 打越 敬祐  
(Keisuke Uchikoshi).

要旨 従来, Fuchsian 双曲型作用素と呼ばれていたものについて, Levi 条件のない一般的な状況で 右(左)パラクトリクスを構成する.

§0. 主要結果

$(x, \xi) \in \sqrt{-1} S^* \mathbb{R}^n$  とし,  $\xi^* = (0, 0, \dots, 0, \sqrt{-1}) \in \sqrt{-1} S^* \mathbb{R}^n$  とする.  $P \in \mathcal{E}_{\xi^*}$  が

$$(1) \quad P(x, D) = (x, D_1)^m + \sum_{j=0}^{m-1} P^{(j)}(x, D) (x, D_1)^j$$

という形になっているとする. ここで,  $(x, D_1)^j = (x, D_1) \cdots (x, D_1)$  とし,

$$(2) \quad \text{ord } P^{(j)} (= P^{(j)} \text{ の階数}) \leq m - j - 1, \quad 0 \leq j \leq m - 1$$

とする。以下， $l$ 階作用素  $X \in E_{2 \times 2}^*$  に対し， $X$  の完全表象 (resp. 主要表象) を  $\sigma(X)$  (resp.  $\sigma_2(X)$ ) と記す。1), 2) より  $\sigma_m(P) = (x_1, \xi_1)^m$  である。  $k \in \mathbb{Q}$  ( $k < 1$ ) へ，

$$(3) \quad k = \max_{0 \leq j \leq m-1} (\text{ord } P^{(j)}) / (m-j)$$

とする。  $k \leq 0$  のとき，  $P$  は Levi 条件をみたすという。

従来は， Levi 条件を仮定したとき  $Pu = 0$  の解  $u$  の特異性の伝播に関する多くの研究がなされた。以下， Levi 条件がなくてもほとんど同様の結果が成立することを示す。

$d \subset \{0, \dots, m-1\}$  へ，

$$(4) \quad d = \{0 \leq j \leq m-1; \text{ord } P^{(j)} = k(m-j)\}$$

と定める。

$$(5) \quad \lambda^m + \sum_{j \in d} \sigma_{k(m-j)}(P^{(j)}) \lambda^j = 0$$

の根を  $\lambda = \lambda_j(x, \xi)$ ，  $0 \leq j \leq m-1$  とする ( $\lambda_j$  を特性根と呼ぶ)。

$$\text{例. } P = (x_1, D_1) \partial^m + P^{(0)}(x', D') \quad (x' = (x_2, \dots, x_m))$$

とする ( $\text{ord } P^{(0)} \leq m-1$ )。  $k = \text{ord } P^{(0)} / m$  であり，

Levi 条件とは  $\text{ord } P^{(0)} \leq 0$  のことである。また，  $0 \leq j \leq m-1$

に対して

$\lambda_j(\alpha, \beta) = \exp\left(\frac{1}{m}(2j+1)\pi\sqrt{-1}\right) \cdot (\sigma_{m-1}(P^{10}))^{1/m}$ ,  
とある.

$\mathfrak{z}^*$  を通る系の陪特性帯を  $\mathcal{C}(\mathfrak{z}^*)$  とする:

$$\mathcal{C}(\mathfrak{z}^*) = \{(\alpha_1, 0, \dots, 0; 0, \dots, 0, \sqrt{-1}) \in \sqrt{-1}S^*M\}.$$

従来よく知られている結果を記す:

定理0.  $k \leq 0$ ,  $\lambda_j \notin \{-1, -2, \dots\}$ ,  $0 \leq j \leq m-1$  とすると,

$$(6) \quad u \in \mathcal{E}_{\mathfrak{z}^*}, \quad \mathbb{P}u = 0, \quad \mathcal{C}(\mathfrak{z}^*) \cap \text{Supp } u = \emptyset$$

から  $u = 0$  at  $\mathfrak{z}^*$  である.

以下, 常  $0 < k < 1$  とする. 本稿の主要結果を記す:

定理1.  $0 < k < 1$ ,  $\lambda_j \notin \{0, -1, -2, \dots\}$ ,  $0 \leq j \leq m-1$ ,

(13/13)  $|(0, \dots, 0, \sqrt{-1})| \ll 1$  とすると,  $b) a$  とは

$u = 0$  at  $\mathfrak{z}^*$  である.

注意.  $\lambda_j \notin \{0, -1, -2, \dots\}$  という条件について説明する.

各  $\lambda_j$  は  $\xi$  について  $k$  次冪次だから,

$$\lambda_j \notin \{0, -1, -2, \dots\}, \quad 0 \leq j \leq m-1$$

$$\Leftrightarrow \lambda_j \cdot \xi_n^{-k} \neq R \xi_n^{-k}, \quad R = 0, -1, \dots \\ 0 \leq j \leq m-1$$

$$\Leftrightarrow \lambda_j \neq 0, \quad \arg \lambda_j \neq (2l+1)\pi,$$

$$l \in \mathbb{Z}, \quad 0 \leq j \leq m-1$$

と存す。

### §1. パラクトリクス

(1), (2) をみたす  $P(x, D)$  を 1 階作用素の行列に直す。

$$L = x, D, I_m + \begin{pmatrix} 0 & & -1 & & \\ & \ddots & & & \\ & & 0 & & \\ P^{(0)} & & \dots & & \\ & & & & -1 \\ & & & & & P^{(m-1)} \end{pmatrix} \quad (m, m) \text{行列}$$

とする。  $u, f \in \mathcal{D}_{\mathbb{R}^n}^*$  に対し、

$$\vec{u} = \begin{pmatrix} u \\ x, D, u \\ \vdots \\ (x, D)^{m-1} u \end{pmatrix}, \quad \vec{f} = \begin{pmatrix} 0 \\ \vdots \\ 0 \\ f \end{pmatrix} \quad m \text{次元ベクトル}$$

として、  $Pu = f \Leftrightarrow L\vec{u} = \vec{f}$  なので  $L$  を考えればよい。

$L$  の右 (左) パラクトリクスを考えるため、次の準備を行おう。

定義 2. ①  $k(x, \eta) \in \mathcal{D}_{\mathbb{R}^n \times \mathbb{R}^n}$  として、

$$\text{supp}' k = \{(x, \eta, \xi, \eta); (x, \eta, \xi, -\eta) \in \text{supp } k\}.$$

②  $A \subset \sqrt{1} T^* \mathbb{R}^n \setminus \mathbb{R}^n$ ,  $B \subset \sqrt{1} T^* \mathbb{R}^{2n} \setminus \mathbb{R}^{2n}$  に対し

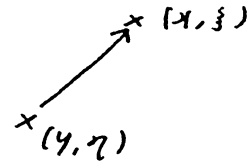
$$B \circ A = \{(x, \xi) \in \sqrt{1} T^* \mathbb{R}^n \setminus \mathbb{R}^n; \exists (\eta, \eta) \in A, \\ (x, \eta, \xi, \eta) \in B\}.$$

注意. ① において、  $\text{supp } k$  (resp.  $\text{supp}' k$ ) を核関数の台 (resp. 作用素の台) という。

②  $k$  について,  $(x, y, \xi, \eta) \in B$  のとき, 点  $(y, \eta)$  から点  $(x, \xi)$  に向かうベクトルを考える.

$(y, \eta) \in A$  なら  $(x, \xi) \in B \circ A$

である. つまり, 右図であ



発点  $\in A$ , 矢印  $\in B$  としたとき,  $B \circ A$  は終点全体を表す.

(defined at  $(\tilde{x}^*, -\tilde{y}^*)$ )

さて,  $k(x, y) \in C_{\mathbb{R}^n \times \mathbb{R}^n}$  が, 次の条件 (7) の (7)' みたすとする ( $C > 0$  は十分大):

(7)  $\text{suff}' k \subset H = \{ (x, y, \xi, \eta) \in \sqrt{1-T}^* \mathbb{R}^{2n} \setminus \mathbb{R}^{2n};$

①  $x_j = y_j, \xi_j = \eta_j, 2 \leq j \leq n,$

②  $x_1, y_1 \geq 0, |x_1| \geq |y_1|,$

③  $2m\xi_1 - 2m\eta_1 \geq 0, |2m\xi_1| \leq |2m\eta_1|,$

④  $2m\xi_n \geq C(|2m\xi_1|, |2m\eta_1|), 1 \leq j \leq n-1.$

(7)'  $\text{suff}' k \subset H' = \{ (x, y, \xi, \eta); (y, x, \eta, \xi) \in H \}.$

注意. (7) の意味は以下の通り.  $\omega$  を  $\tilde{x}^*$  の小近傍とし,

$f \in C_{\mathbb{R}^n}, \text{suff } f \subset \omega$  とすると, (7) のとき,  $\int k(x, y) f(y) dy$

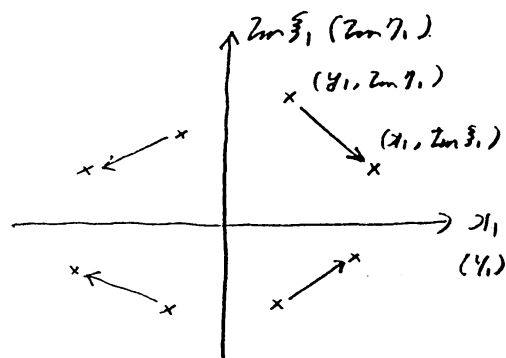
$\in C_{\tilde{x}^*}$  は well-def で,  $\text{suff}(\int k f dy) \subset H \circ \text{suff } f$

となる. 上に述べた通り,  $(y, \eta) \in \text{suff } f, (x, y, \xi, \eta) \in H$

のとき,  $(y, \eta)$  から  $(x, \xi)$  へ向かうベクトルを全て書き尽せ

ば,  $\text{suff} \int k f dy$  を上から評価できる. そこでこのベクトル

の性質を調べればよい。(x\_1, z\_1) を時向 (に向する文字),  
 (x\_2, \dots, x\_n, z\_2, \dots, z\_n) を空向 (に向する文字) と考えて, このベ  
 クトルは (1) の ① により, 空向方向には 0 ベクトルである.  
 つまり, この積分作用素は空向方向に *microlocal property*  
 をもつ (singularity をふやさない). 一方, 時向方向の  
 (y\_1, z\_m y\_1) と (x\_1, z\_m z\_1) を同一  
 の平面に書き込むと右図の様にな  
 る (1) の ②, ③ より). つまり  
 この二点は同一象限上とあり,  
 このベクトルは横軸 (resp. 縦軸)  
 方向に遠心的 (resp. 求心的) である. (1) をみたす  $K(x, y)$  の定  
 める積分作用素は, こういうベクトルに沿って *singularity*  
 を伝播させる (1)' の場合は逆向きに伝播させる).



以上の議論は *Flanges* の論法である. さて,  $L$  について次  
 の結果を得る:

定理 3. ① 定理 1 の仮定のもとで, (1) をみたす積分核  
 $K(x, y)$  ( $m \times m$  行列) が存在し,  $K$  の定める積分作用素  $\mathcal{K}$  は  
 $SL(x, D) = Id.$  ( $a \neq 0$ ) をみたす.

②  $P$  の特性根  $\lambda_j(x, z)$  が  $\lambda_j \notin \{0, 1, 2, \dots, l\}$  をみたすとき,  
 (1)' をみたす積分核  $K'(x, y)$  ( $m \times m$  行列) が存在し,  $K'$  の定め

積分作用素  $S'$  は  $LS' = Zd$ . ( $\text{at } \mathbb{R}^*$ ) を満たす.

定理 1. は 定理 3. ① から出てくる. 定理 3. ① は ② (の  
バリエーション) から出てくる. そこで 定理 3. の ② について,  
以下証明の概略を述べる.

### § 2. シンボルクラス.

以下常に  $1 \ll C_1 \ll C_2 \ll C_3$  という3つの定数を固定する.  
 $\sqrt{t} T^* \mathbb{R}^n \subset T^* \mathbb{C}^n$  と考えて,  $T^* \mathbb{C}^n$  の変換をも  $(x, \xi)$  と書  
く.  $i = 0, 1, 2, \dots$  に対し,

$$\Omega_i = \{ C_1 |\operatorname{Re} x_j|, C_1 |\operatorname{Im} x_j| < 1, \quad |s_j| \leq n, \\ \operatorname{Im} \xi_n > C_2 (i+1),$$

$$\operatorname{Im} \xi_n > C_2 (i+1),$$

$$\operatorname{Im} \xi_n > C_2 |\operatorname{Im} \xi_j|, \quad |s_j| \leq n-1,$$

$$\operatorname{Im} \xi_n > C_3 |\operatorname{Re} \xi_j|, \quad |s_j| \leq n \}.$$

$C_1, C_2, C_3$  が目ざかりであるが,  $\Omega_0 \supset \Omega_1 \supset \Omega_2 \supset \dots$  は  
いずれも  $\mathbb{R}^*$  方向の錐を表す.  $\Omega_0 = \{ \Omega_0, \Omega_1, \dots \}$  とする.

定義 4.  $\mathcal{S}_+ (\Omega_i)$  は次の条件を満たす形式  $\sum_{i=0}^{\infty} T_i (x, \xi)$   
全体を表す: 各  $T_i$  は  $\Omega_i$  で正則で,  $\exists C \gg 1, \forall \varepsilon > 0, \exists C_\varepsilon > 0,$

$$|T_i (x, \xi)| \leq C_\varepsilon C^{-i} \exp \{ (-\operatorname{Re} (x, \xi))_+ + \varepsilon \operatorname{Im} \xi_n \}$$

on  $\Omega_i$ ,  $i = 0, 1, 2, \dots$  ( $t_+ = \max(0, t)$ ,  $t \in \mathbb{R}$ ).

例  $T_i = c^{-i} \exp(\int_0^{x_i} -t \xi_i dt)$ ,  $i = 0, 1, 2, \dots$  なる  $\sum T_i \in \mathcal{S}_+$ .

$\Delta_i = \{ \xi \in \mathbb{R}^n; \sum_{j=1}^n \xi_j > C_2(i+1), \sum_{j=1}^n \xi_j > C_2 |\sum_{j=1}^n \xi_j| \}$ ,  
 $1 \leq i \leq n-1$  として,  $\sum_{i=0}^{\infty} T_i(x, \xi) \in \mathcal{S}_+(\Omega)$  に対し,

$$\check{T}(x, y) = (\lambda \sqrt{t})^{-n} \sum_{i=0}^{\infty} \int_{\Delta_i} e^{(x-y)\xi} T_i(x, \xi) d\xi$$

とする.  $\check{T}(x, y)$  は適当な複素領域で正則となり,  $\check{T}(x, y)$  はあるマイクロ函数  $\sigma(A)$  を与え,  $\sigma(A)$  は条件 (7) を満たすことがわかる.  $\check{T}(x, y)$  を積分核とする作用素を象徴的に  $T(x, D) = \sum_{i=0}^{\infty} T_i(x, D)$  と書き, このとき  $\sigma(T) \sim \sum_{i=0}^{\infty} T_i(x, \xi)$  と記す. このとき, 次のことがわかる.

命題 5  $A(x, D) \in \mathcal{E}_{q^*}$  を  $l (< \infty)$  階の microdifferential operator とし,  $\sigma(A) \sim \sum_{i=0}^{\infty} A_i(x, \xi)$  ( $A_i(x, \xi)$  は  $\xi$  に関して  $(l-i)$  次斉次) とする.  $\sum_{i=0}^{\infty} T_i(x, \xi) \in \mathcal{S}_+(\Omega)$  に対し,

$$T'_i(x, \xi) = \sum_{j+l+|k|=i} \frac{1}{\alpha!} \partial_{\xi}^{\alpha} A_j \partial_x^{\alpha} T_k$$

とすると,  $\sum_{i=0}^{\infty} T'_i(x, \xi) \in \mathcal{S}_+(\Omega)$  であり,

$$\sigma(A(x, D)T(x, D)) \sim \sum_{i=0}^{\infty} T'_i(x, \xi).$$

となる.



$T_i(\alpha, \beta) = \delta_{i0}$ ,  $i=0, 1, 2, \dots$  なら,  $\tilde{Y}(\alpha, D) = Id$  である. そして, 定理3 の②の条件のもとで,

$$\sigma(L(\alpha, D) T(\alpha, D)) \sim I_m + 0 + 0 + \dots$$

となるような  $\sum_{i=0}^{\infty} T_i(\alpha, \beta) \in \tilde{\mathcal{S}}_+(\Omega)$  を求めることが可能なのである. そこで 定理3 の②が成立する.

上述の  $\sum_{i=0}^{\infty} T_i(\alpha, \beta)$  を求める計算は省略するが, 最も簡単な例だけをあげておく ( $\alpha \in \mathbb{C}$ ):

$$L = \alpha, D, I_m + \begin{pmatrix} 0 & -1 & \dots & 0 \\ & \ddots & \ddots & \vdots \\ & & 0 & -1 \\ \alpha D_n^{m-1} & 0 & \dots & 0 \end{pmatrix} = \alpha, D, I_m + L'$$

とする. 漸近展開の番号を少しずらして(ずらしてもよい).

$$(8) \quad (\alpha_1 \xi_1 + \alpha_2 \partial_{\alpha_1}) \psi + L'(\xi_n) \psi = I_m$$

を解く.

$$\Lambda = \begin{pmatrix} \xi_n^k & & & \\ & \ddots & & \\ & & \xi_n^{(m-1)k} & \\ & & & \end{pmatrix}$$

として, (8)の左から  $\Lambda^{-1}$ , 右から  $\Lambda^{+1}$  をかけて,

$$(9) \quad (\alpha_1 \xi_1 + \alpha_2 \partial_{\alpha_1}) \Lambda^{-1} \psi \Lambda + \Lambda^{-1} L' \Lambda \cdot \Lambda^{-1} \psi \Lambda = I_m$$

を解く.

$$\Lambda^{-1} L' \Lambda = \begin{pmatrix} 0 & -\xi_n^k & \dots & 0 \\ & \ddots & \ddots & \vdots \\ & & 0 & -\xi_n^k \\ \alpha \xi_n^k & 0 & \dots & 0 \end{pmatrix}$$

となり,  $\Lambda^{-1}L'\Lambda$  の固有値は,  $\lambda_j = \exp\left(\frac{1}{m}(2j+1)\pi\sqrt{-1}\right)\alpha^{1/m}\xi_n^k$ ,  
 $0 \leq j \leq m-1$  となる.  $\Lambda^{-1}L'\Lambda = M'$ ,  $\Lambda^{-1}U\Lambda = V$  と書い  
 て,

$$(10) \quad (x_1 \xi_1 + x_1 \partial_{x_1}) V + M' V = 0$$

とする. 問題を少しかえて,  $M'$  の固有値が

$$\lambda_j = \mu_j \cdot \xi_n^k, \quad 0 \leq j \leq m-1$$

とする. ここで,  $\mu_j$  は実数で,  $(\arg \mu_j) + \frac{k}{m}\pi \in (-\frac{\pi}{2}, \frac{\pi}{2})$ ,  
 $0 \leq j \leq m-1$ , とする (本当は  $(\arg \mu_j) \neq (2l+1 - \frac{k}{m})\pi$ ,  $l \in \mathbb{Z}$ ,  
 $0 \leq j \leq m-1$  ではないが, このときは計算は複雑になる). 更に,  
 $M'$  が対角行列の場合を考えることにする. このとき, (10) の  
 解として,

$$V = \int_0^{x_1} \exp\left(-x_1 \xi_1 I_m - M' \log x_1\right. \\ \left. + t \xi_1 I_m + M' \log t\right) \frac{dt}{t}$$

$$= \int_0^1 \exp\left(-(1-s)x_1 \xi_1 I_m + (M' - I_m) \log s\right) ds$$

をとると,  $V + 0 + 0 + \dots \in \mathcal{S}_+(\Omega)$  となる.

文献 §1 の議論は

[1]. N. Hanges, Parametrix and propagations of singularities for operators with non-involutory characteristics, Indiana Univ. Math. J., 28(1979),

87-97

による、

$P(x, D)$  が Levi 条件をみたす場合の研究は夥しい。

hyperfunction 関係のものだけ挙げておく。

[2]. S. Nakane, Propagation of singularities and uniqueness in the Cauchy problem at a class of doubly characteristic points, *Comm. Partial Differential Equations*, 6 (1981), 917-927.

[3]. T. Ôaku, A canonical form of a system of microdifferential equations with non-involutory characteristics and branching of singularities, *Invent. Math.*, 65 (1982), 491-525.

[4] H. Takara, Fuchsian type equations and hyperbolic equations, *Japan J. Math.*, 5 (1979), 245-347.